

「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

当社顧問石井正文氏(前駐インドネシア日本国大使)による気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

第9回:アメリカは東南アジアに「続々と」戻ってきた

2021年8月26日配信

【ポイント】

- ・バイデン政権の同盟国・同志国との関係再強化の一環で、最近、米国の東南アジア関与が顕著。
- ・外交における対中考慮優先がますます鮮明に。その観点から、関与先も戦略的な選択で、日本と同様の発想。メッセージも、ASEAN重視、選択を強くないなど、よく考えられたもの。
- ・10月26日～28日のASEAN関連首脳会合(ブルネイ)に向けた動きに要注目(含対中関係)。
- ・なお、今回、中国の核軍備増強が新たなアジェンダになったことに要注目。

【本文】

■ここ数週間、バイデン政権の東南アジア関与が顕著。

- ・中国に対しては、一枚落ちのシャーマン国防副長官を派遣(7月25日～26日)
- ・一方、その直後に、オースチン国防長官が東南アジア歴訪(8月26日～30日)
米軍艦に母港を提供するシンガポール+南シナ海重要国のベトナム、フィリピン、シンガポールでは、ASEAN重視を打ち出した、よく練れた演説実施。
フィリピンでは、懸案だったVFA(訪問軍地位協定)継続を実現。極めて重要な進展。
- ・同時期の7月28日、プリンケン国务長官インド訪問(3月のオースチン国防長官訪問に次ぐ)
中国の反発を承知で、ダライラマ事務所代表に面会。
- ・オースチン国防長官が訪問しなかったインドネシアとは、8月3日にレトノ・インドネシア外相が訪米しプリンケン国务長官と会談。「戦略対話」開始に合意(中国を強く意識した動き。)
- ・8月初旬の一連のASEAN関連外相会合には、オンラインでプリンケン国务長官が参加。
中国に対しルールに基づく行動を求め、南シナ海、香港、新疆ウイグル等厳しい発言。
- ・8月中には、ハリス副大統領が、ベトナム(米副大統領として初)、シンガポール訪問予定。

■米側のメッセージは、ASEAN諸国の感情に配慮した、よく練れたもの。

- ・ASEAN一体性支持。(実態はさておき)米中選択を強くないという建前維持。
- ・ミャンマーについては、現軍事政権を厳しく批判する一方で、解決についてはASEAN主導の「5つのコンセンサス」を支持し、ASEANのイニシアティブへの期待を表明(うまく自分の逃げ道を用意。)

- 一方、ASEAN内では「踏み絵を踏まない分断」が進行中⇒対中共同戦線を組める国には限りあり
 - ・その実態を踏まえれば、(インドに加え)インドネシア、ベトナム、フィリピン、シンガポールを優先重視するのは良い選択。これは、日本の相場観とも一致。

- 今後、秋のASEAN関連首脳会合(10月26~28日)に向けた動きに要注目。
 - ・ミャンマー情勢に大きな進展は望めず。米国が大統領レベルで「我慢」できるかどうか？
 - ・「クワッド+」に東南アジア諸国を巻き込んでいくことは、今後とも無理(=踏み絵の強制は無理)。この点、引き続き我慢できるか？同時に、どのような「实际的連携」を構築できるか？
 - ・一連の米国の動きに対して、中国がどのような動きをしてくるか。
 - ・ASEAN首脳会合が米中関係自体にとりどのような舞台になるか？(李克強首相の分担+おそらくバーチャルなので、大きな動きは無いと思われるが)。

- なお、ASEANの舞台で、中国の核軍備増強の問題が新たに持ち上げられたことに要注目。
 - ・ブリンケン国務長官がARF(ASEAN地域フォーラム)の場で提起。日本(茂木外相)も呼応。
 - ・本年7月以降、中国の大規模な核ミサイルサイト新設に関して、累次報道あり。
 - ・一方、米口では、戦略的安定(=核軍備管理)に関する協議が再開。中国をこれにどう巻き込むかが、今後必ずや重要課題になる(この点については、米口には共通利益あり)。
 - ・なお、本件は、ASEANにとっても、地理的に考えて他人事ではない。

(以上)

りそな総合研究所 顧問 石井正文